

第4次葛飾区地域福祉活動計画 第1回策定委員会 議事要旨

開催日時	令和2年11月13日（金）午後1時30分～3時15分
開催場所	堀切地区センター 3階 ホール
出席委員	谷澤委員、杉本委員、浅野委員、津村委員、河合委員、小野委員、三尾委員、根岸委員、加藤委員、根本委員、矢頭委員、細谷委員、河原塚委員、山田委員、田中委員、新井委員、倉谷委員、風間委員、小林委員、大山委員、久野委員
配布資料	【資料1】第3次葛飾区地域福祉活動計画（本編、概要版） 第2次かつしかボランティア活動推進計画（概要版） 【資料2】第4次葛飾区地域福祉活動計画の策定検討の考え方 【資料3】計画策定に関わるアンケート調査の概要（案） 【資料4】葛飾区地域福祉活動計画作業委員会設置要綱

■ 議事

1. 開会

皆様方には第4次地域福祉活動計画策定委員会委員をお引き受けいただき、本日はお忙しい中を第1回策定委員会にご出席いただいたことに御礼を申し上げます。各委員の皆様方には日ごろより社会福祉協議会の運営や活動に対して多大なご尽力をいただいております、心から感謝申し上げます。

本社会福祉協議会において、区民の方々をはじめ、社会福祉関係者、保健・医療・教育関係者、行政機関などさまざまな方々との産学協働による誰もが安心して暮らすことができる福祉のまちづくりの実現を目指した、平成29年3月に策定した第3次葛飾区地域福祉活動計画の推進に当たってきた。現在、我が国が世界に類のないスピードで超高齢社会へと向かっていることは申すまでもないが、昨今では子育て世帯の孤立や虐待の問題、また生活困窮者や引きこもり等、従来の福祉制度だけでは十分に対応できないさまざまな困難を抱えた人たちも増加している。加えて、地震や風水害など自然災害に対する不安の高まり、そして今般の新型コロナウイルス感染症拡大下において、私たちが今まで経験したことがない新しい問題や課題が出てきた。

こうした中、この活動計画は策定から4年が経過し、令和3年度には計画期間の最終年度を迎えることから、計画に掲げる各事業の取り組み状況の点検と評価を実施するとともに、葛飾区が今年3月に作成した葛飾区地域福祉計画とともに地域福祉を推進する指針となるよう、現在の社会情勢から生まれる新たな課題や拡大・充実が必要となる現行課題への対応も含めて見直しを行いたいと考えている。また、見直しにあたり、現在は第2次かつしかボランティア活動推進計画として別立てになっているものを統合し、この2つを1つの計画として運用していく考えである。

各委員方からは忌憚のないご意見、ご要望等をいただきながら、地域の実情に即した葛飾らしい住民活動計画を作成していきたいと考えている。皆様方には特段のご協力を賜うよう、心からお願い申し上げます。

2. 委員紹介

委員、事務局及び受託会社の紹介があった。

3. 正副委員長の選出

事務局より、委員長を河合委員、副委員長を小野委員との提案があり、了承された。

4. 正副委員長あいさつ

委員長

私は、葛飾区の社会福祉協議会と行政とのお付き合いは非常に長く、20年以上になる。私は前回の第3次地域福祉活動計画を委員長として策定し、また、今日お見えの新井部長の下で区の地域福祉計画を作り、さらに現在策定中の区の基本構想と基本計画にも関わっている。特に社会福祉協議会への思いには特に強いものがあり、委員会の運営の中でまた発言させていただきたい。

副委員長

委員長の補佐役ということで務めさせていただきたい。社会福祉協議会の活動計画には今から28年ぐらいい前に初めて関わらせていただいた。それ以来、それぞれの地域でいろいろな活動が試みられている。その内容についての情報提供をさせていただきながら、葛飾区で生きづらさを感じられている方々に、住民による住民のための計画を推進していきたいと考えている。

委員長

本日の議事に入りたい。今回は、まず第3次地域福祉活動計画と第2次かつしかボランティア活動推進計画の概要について、次に第4次地域福祉活動計画を作るにあたっての作業について説明をいただいて、計画をどのように作っていくのかを皆さんと考えていきたい。

議事

①葛飾区地域福祉活動計画及び第2次かつしかボランティア活動推進計画の概要について

事務局より、葛飾区地域福祉活動計画及び第2次かつしかボランティア活動計画の概要について説明があった。

委員長

第4次計画では、ボランティア活動推進計画も地域福祉活動計画の中を含めて1本で作っていくという提案がなされた。これから、まず時間の許す限り現行計画の評価をしたい。計画を作る際には体系性が求められ、あらゆる事業が入り込むから非常に細かくなっているが、第3次地域福祉活動計画は4つの重点課題に絞ってやるという組み立てとした。葛飾区は東京23区の中では唯一、地域割にして19地区で小地域福祉活動を展開している。皆さんから、この計画に関わってのご意見をいただきたい。

委員

小地域福祉活動に関しては、私が住んでいる東金町地区と四つ木地区が最初にモデル地区として2年間やって、その後12、3年活動している。その間に社会情勢が変化したと感じている。それは地域性もあると思う。東金町地区は商店街がほとんどなく自営業者が少ないため、ボランティアに関わってられないという方が多い。私は自治会に関わって35年ぐらい役員を務めてきたが、自営業だったのでできたと思っている。いろいろなことをやるのはいいが、リーダーになってくれる方がなかなか見つからな

い状況だ。その点もこれから考えていかなければいけない。私は民生委員もやっているが、今は民生委員や自治会の役員になってくれる方もなかなか見つからない。高齢者クラブ自体も、高齢者の数は増えているのに会員数が少なくなっている。おそらく皆さん趣味が違っているので、自分に合ったところに行って活動しているのではないか。今、小地域福祉活動は19地区で行われているが、もっとより小さな地域での福祉活動、見守りが大切ではないか。

委員

小地域福祉活動は非常に良い事業だと思っているが、委員が言ったように町会、自治会に限らず、いろいろな団体で会員数が減っているのが現状だ。私ども「手をつなぐ親の会」も一時は会員が600名ほどいたが、現在は300名を切る状況だ。会員になっていると情報は入りやすいけれど、特に特典があるということはない。また、自治会に入っても入らなくても特に違いはない。町会活動をされている方は一生懸命にやったださっているが、マンションが増えていっても誰も入ってこない。各種団体で会員数がどんどん増えて魅力的な会だということで入ってくれば、小地域福祉活動も発展していくだろうと思う。

委員

東北の地震のときに応援したことがある。そのときに一番活躍したのが高校生だった。ただ、ボランティアで来たというが動けない人もたくさんいた。だから、ボランティア組織も地域で消防団みたいな組織を若い人たちに作ってもらって、いざというときに応援できるような体制を取ってくれば力強いのではないか。消防団も地域でなかなか集まらないけれども活動している。中学生とか高校生、大学生の集まりを応援して組織を作ってもらおう。やはり何かというときには若い人たちの力が一番大事だ。その組織をメンバーとして立ち上げればおのずからみんなが寄ってくる。いざというときに来てくれと言っても誰も来ない。そういう組織に若い人たちに入ってもらってボランティアの知識を継いでもらえると面白いのではないか。そういうアイデアもある。

委員

私は新小岩に住んでいて、社協との関わりは小地域活動で小松菜いちょう倶楽部を運営している。この活動は、お年寄りに昼食を提供し、あやとり、折り紙、ギター演奏に合わせて歌うなど、いろいろな活動をしている。その活動の主体は民生委員と町会の役員である。40人から50人の食事を作るのは非常に難しく、最初は新小岩の東京聖栄大学で教えてもらったり、社協からアドバイスをいただいたりして、今は順調にやっていると私は考えている。地域のお年寄りの全体の顔が見えてきたようだが、思っていたよりは深入りはできなかった。あと、新小岩は東京都健康総合長寿センターとも提携してやっている。活動は、お年寄りとの接点、いざというときの孤独死をなくそうということでやっている。社協とのつながりがあって良かったと思っている。

委員

私は、社協で年に数回ある、施設でボランティアをやっている人たちの交流会を兼ねた研修に出席させていただいて、とても勉強になっている。そこではいろいろな施設でボランティアをしている人たちとも知り合って、いろいろな状況を話し合っている。ほかの人の悩みなども認識できたり、ボランティアをやっている人でもちょっと変わった考え方を持っている方もいるんだとか考えたり、とてもいい機会だと思っている。やはりボランティアをするという目標に向かっていくことは素晴らしいことだと

思っている。これからも社協にお世話になりたいと思っている。

委員長

専門家から、葛飾区民あるいは葛飾の社協をどう見るか。今、基本構想、基本計画あるいは介護保険事業審議会でも議論になっている重要なテーマは、健康づくりという場合に上から何かしなさいというかたちでは、本当の意味での区民の健康は向上していかない。区民自身がどういうふうを考えるかが非常に重要だと思う。医師会、歯科医師会の立場からのご意見をいただきたい。

委員

健康づくりのポイントとして、福祉のボランティア的な活動をやっているところでの担い手の問題と、どこをターゲットにするかが非常に大事なところだ。今までやってきてくださった方が高齢化されて、なかなか若い世代が入ってこないという構造的な問題を解決するような方策をやらなければいけない。これは医師会でも同じで、入ってきた若い人たちをどう活用していくかは、これから維持していくために非常に大事なことだ。

私は災害面もやっているので災害対策について話をさせていただきたい。医療的なことをやるのは医者の中の話だが、避難所の立ち上げを考えていくとPTAとか親の会の活用が非常に重要になってくる。この地域で実際に災害が起きたときという問題を、その世代の若い人たちに提起して考えてもらう。先ほど「手をつなぐ親の会」の方もおっしゃっていたが、若い人たちを活動に巻き込んでいくときにそういうところを押さえていかないとなかなかうまくいかないのではないかな。そこが今後の社会福祉的なボランティア活動をきちんと維持していくための非常に重要なポイントになると思う。そこをまず押さえることを今後の計画に盛り込まなければいけない。

それと、ボランティア活動の受け手はどこか。体力が落ちてきて動けなくなる問題と認知症的な問題などの高齢者が抱えている問題にどうアプローチしていくか。また、若い世代の子育てとか、今の生活の中でどうしていくか。狙わなければいけないポイントは幾つかある。それに対してどうアプローチしていくかが非常に重要だ。新しい若い活力のある人たちを入れるところで、いろいろなテーマをその人たちに提示して興味を持ってもらうことが必要だ。特に高校生が災害時に役立つというお話はまさにそのとおりだ。しかし、高校は4校ぐらいしかないから高校生を葛飾区として把握していくのはなかなか難しい。中学校単位でボランティア的なものの教育でアプローチしていく。若いうちから教育したほうが早いから、できれば小学生でもいいのではないかな。ボランティア精神的なものを教え込んでいけば、次の世代にそれがつながっていく。それをやらないとこれから先のボランティア活動は立ち行かないのではないかな。いろいろな問題を抱えている方にどうアプローチしていくかというのはそれぞれの皆さんにあると思うので、その辺をうまくまとめ上げていくような組織を作ってその中で統一してやる。区でやっている事業の中にはいわゆる縦割りになってしまっているところが非常にあるので、それを打破できるのは社会福祉協議会で、その先導役になっていただくことが大事ではないかと考えている。

委員

葛飾で生活して40年が過ぎたが、歯科医師会の先生方が活動している会を通して、皆様方の活動に我々の専門性をいかに生かせるか、生かしていけるかというところから、私は福祉の問題に関わりを持ってきた。私は歯科医師会に入会してから障害者歯科、寝たきり在宅高齢者の診療に関わってきた。その中で我々の専門性でどう対応していくかということを中心に考えながらやっている。町会や民生委員の方がいろいろな活動をなさっている、その後ろから付いていく中で我々はもっとこういうことができる

ということを外に向かって少しずつ話しながら、今までやってきた。これからも私たちができることを、先生方の意見に従いながら頑張っていきたいと思っている。

委員長

健康という点では、医療関係は患者が来なくなると繋がりがなくなってしまう。葛飾区として区民の健康を向上させるために、区民本人がもっと自覚して生活や態度を変えていくという働き掛けが必要だ。社会福祉協議会で地域づくりということで、医療機関につながらないけれど問題を抱えている人との繋がりをどうしていくかも一緒に考えていきたい。全国的にも健康を中心としたまちづくりをやっている先進事例があるが、そこでは住民の教育を重視してやってきている。

委員

健康づくりということでは、私の町会では朝ラジオ体操をやっている。体操をやらなくても、朝、会場まで歩いてくる。これも1つの健康づくりだ。体育館で健康体操もやっているが、人がなかなか集まらない。私は体を動かすことを奨励して、歩くだけでも健康にいい、来てみんなが体操をやっているところを見るだけでもいいという指導をしている。お茶は家ではなくて友達の家に行って飲めということも指導している。家にこもるということが一番健康を害する。人の話を聞く、話す、これが健康だと思っている。あくまで体操だけではなくて、みんなで知恵を絞ってやる。私の地域ではグランドゴルフ、テニス、卓球、いろいろな催し物や賞品を出して大会をやっている。ただ、残念なことに家にこもってしまう人が多いが、この人たちを引き出すのに一番大事なのは友達だ。友達に誘われるというのが一番効果的なので、そういう指導をしていきたいと思っている。

委員

私はボランティアセンターに25年関わってきたし、葛飾区以外にも墨田区と中央区の社会福祉協議会ボランティアセンターとの関わりもある。私が感じる葛飾区のボランティアセンターのイメージは、職員の熱意や情熱はほかの区よりも圧倒的にあると感じている。その当時の職員の方は今もほとんどの方が残っていて、その方たちの熱意や情熱があったので、例えばボランティアまつりにしてもほかの区と比べて盛り上がり方が違う。それは職員の方の熱意があったことだと思っている。ボランティアまつりの実行委員会は毎回けんかになるぐらい、成功させたいというボランティアの熱意や情熱が25年ぐらい前にはあったが、ここ数年はそういう意見を言っていたボランティアが引退されて、会議をやってもなかなか意見が出てこなくなった。昔と比べてボランティアの熱意や情熱は薄れてしまったという印象がある。しかし、職員の方は残っているので、こういう具体的な活動がどんどん広がっているのだという思いがある。

委員長

ほかの区と比べて葛飾区社協の職員は熱意があるという話だった。全国で社会福祉協議会は歴史的にもいろいろな活動をやっているが、山形県社協の事務局長をやった方は、社協の職員が机の前に座って事務をこなしていると「地域へ出る」と怒っていたという有名なエピソードがある。長いお付き合いの間で葛飾区の社協を見ていると、業務がどんどん増えて机で処理しなければならないことがたくさんある。その中で社会福祉協議会の職員の仕事とは何か、何を大切にすべきか。場合によっては業務を整理・統合してもっと地域に出る、地域を知ることが必要ではないか。

委員

社会福祉協議会は、地域福祉を推進する上での区との重要なパートナーであると考えている。行政の中ではどうしても救いきれないという問題が多々出てきている。社会福祉協議会と、それを支える地域の社会福祉法人、その他の地域団体等の協働はとても大切な視点である。どうしても行政は必要最小限のサービスという意味合いが強く、生きがいつくりや生活のうるおいについてなかなか手が差し伸べられない。それを補うという意味でも、地域との協働、社会福祉協議会との協働はとても大切だと思う。地域づくりにはさまざまな課題があるというご指摘だが、地域の中の資源を開発し、その開発した資源に関して個の支援に繋げていくという取り組みが今後にも必要になってくる。その点で区と社会福祉協議会が協力し合って進めていきたい。

委員長

日本の場合、行政と住民の主体的な活動との関係はなかなか難しいものがある。西ヨーロッパの国々では民間活動が非常に力を持っていて、国や行政に物を申して変えていくぐらいの活動を展開している。日本では行政の下請け的な側面がある。住民の主体的な活動の独自の意味をこの計画の中でも具体的に考えていきたい。

委員

私たち知的障害者の親の会のグループの上の団体として葛飾区の身体障害者の連合会があったが、昨年解散した。なぜかと言うと会員数が減って障害別の団体が維持できなくなってきたからだ。間違いなく葛飾区の人口の中で障害者の数は増えているが、団体に入る人が減ってきている。PTAの活動に参加する人がいなくて会長のなり手がなくて困るという現状である。私たちは地域に障害のある方もいることを知っていただくとうと1年に1回ふれあいまつりを開催して、まずは子どもたちに知ってもらいたいということで小学校低学年向けの出し物もやっている。このときは足の踏み場もないぐらい大盛況である。親の会に入っていない障害のある方も近隣の子どもたちも来る。この小地域福祉活動でも魅力ある、みんなが参加したいというようなものを作って行く。あと、どうして団体の会員にならないのかと聞くと、一番多い答えが入って何のメリットがあるかということで、これはすごいキーポイントだと思っている。

委員長

こういう話を積み重ねていって計画を作りたいが、それには時間がかかってしまう。

委員

社会福祉協議会の批判をすることは立場上まずいので、民生委員としての立場からお話ししたい。葛飾区は江東5ブロックでは欠員数が一番少ない。それは下町人情が厚いからではないか。江東区の埋立地のほうでは民生委員が1人も出ていないし、民生委員を推薦する母体としての町会組織がない。葛飾区では自治町会組織がしっかりしていることが民生委員の欠員が少ないことの大きなポイントである。葛飾区はまだまだ人情が厚いところで、ほかの区と比べて町会組織がしっかりしている。

小地域福祉活動はその地域の住民全員が対象であるが、民生委員は高齢者ばかりだ。いろいろな年代の人を入れていく、高校生も巻き込んでという話もするが、うまくいかない。なぜかと言うと、今19地区でやられている小地域福祉活動のほとんどが高齢者対象であるからだ。高齢者で近所の仲間づくりが基本になっている。さらに、関わっている民生委員・児童委員が小地域福祉活動イコール高齢者のた

めの活動とと思っている人が非常に多い。これは社会福祉協議会がそうではないということを書いていいのではないか。先ほど話が出た小松菜いちょう倶楽部でも食事は高齢者が対象になっている。こども食堂に関してはボランティアセンターで登録があるが、本来は小地域福祉活動でどんどん取り上げていてもいい。

小地域福祉活動は始まって10年経つので、この第4次計画の中でさらに突っ込んだ議論ができればよいと思っている。先ほど高校生を巻き込んでという話があったが、今、高校生はどこの都立学校を受けてもいいことになっているので、地元で高校生が残って活動していけるのか。その点を考えていただきたい。

さらに7ページの福祉人材の育成活用について、手話の講習と手話通訳者派遣だけというのは少ないのではないか。社会福祉協議会としては予算の関係でこれ以上何もできないし、最終的には民生委員の負担が増えて、なり手がなくなっていくのではないかと。そういう点も考えていって良い計画ができればいいと考えている。

②第4次葛飾区地域福祉活動計画の策定検討の考え方について

事務局より、第4次葛飾区地域福祉活動計画の策定検討の考え方について説明があった。

委員長

事務局案として基本理念と基本目標を継承するという提案があるが、これについては作業委員会あるいは本委員会で検討していきたい。

委員

葛飾区内に外国人コミュニティができあがってきている。そのコミュニティをそれだけで孤立させるのか、取り込んでいくのか。そういう点は検討したほうがいい。これだけ国際化が起こると給食などでハラル食を使うという宗教的な問題も実際に教育現場では出てきている。そういう視点を基本理念の考え方に盛り込んでいただきたい。

委員長

葛飾区の基本構想、基本計画では多文化共生の推進ということで重要な項目になっているが、現状分析がまだ足りないという委員会での発言もあり、区としても重視している。

事務局

社会福祉協議会の窓口にはかなりの外国人が来ている。私どもは多言語翻訳機を使って対応しているという状況だ。これから新しい計画を作る上で外国人の問題は非常に重要だと思うので、次回以降に提案をしていきたい。

委員長

重要な指摘で、その点は検討すべきだと思う。今後具体的な項目は作業委員会で案を作り、この本委員会で検討していく。

②第3次葛飾区地域福祉活動計画 概要版(案)について

事務局より、計画策定に関わるアンケート調査の概要(案)について説明があった。

委員長

活動を担っている人を中心にこの調査は組み立てられているが、小地域福祉活動で見えてきている区民のいろいろな課題も調査の一環で聞き取れたらいいのではないか。区民がどのようなことで困っているかが基本で、それに向けての活動だから、活動を担っている人だけではなくて、その人を通して具体的な区民の困り事が見えてくるといい。作業委員会で具体的に検討していただきたい。

④作業委員会の設置について

事務局より、葛飾区地域福祉活動計画作業委員会設置要綱について説明があった。

委員長

作業委員には、この委員会外のメンバーも入るのか。

事務局

学識経験者は小野委員にお願いします。それ以外の委員は本委員会とは全く異なる。

委員長

委員長は作業委員会を開いてから決めるが、事務局案としては小野先生にお願いしたい。作業委員会で検討して、その結果をこの本委員会に上げるということによろしいか。

事務局より、今後の予定について説明があった。

委員長

作業委員会でアンケート調査の中身を決定して概要が決まったところで、この委員会のメンバーに情報を流して、場合によっては意見を聞くことをやってほしい。

5. 閉会

(以上)